

『和歌一字抄』の注記をめぐって

——注記を付す意図——

梅田 径

Abstract

一 はじめに

『和歌一字抄』には他出を確認できない歌や他に詠作の見えない人物の歌が数多く存し、その特異な構成ともあいまって注意すべき私撰集として位置付けられてきた。その研究は諸本論や題詠論を中心として展開されてきたが、伝本も多く系統が複雑で決定的な善本を認定できない。先学による諸本研究の成果は校本の完成に結実したが、いまだ多くの問題が残されたままである。

その一つに「注記」の問題がある。『和歌一字抄』には人名及び出典について多数の注記が付されているが、これらが著者の手によるものであるか、後人の増補であるのか判然とせず、どのような目的で付されているのかも分かっていない。後に触れるように現在のところ後人説が有力であるが、清輔自筆の注記があつた可能性も存するのではないかと考えられる。

従来、注記に関する問題は、自筆か後人による増補かという問題に集中して論じられてきた。そこから得られた知見は少なくないが、この注記がどのような効果を期待して付されたのか、という観点からはほとんど論じられることがなかった。注記の効果や意図を考えることは、『和歌一字抄』がどのように読まれることを期待されて制作（あるいは書写）されてきたのかを考えることにも繋がるだろう。

本稿ではこうした観点から注記の問題を検証した上で、少なくとも出典注記に関しては清輔が自ら付した部分があつたものと考えたい。特に原撰本系

統で出典注記が付されている内閣文庫蔵本に清輔の手による部分が残存していると仮定し、それらの検討を通じて『和歌一字抄』のコンセプトがどのように形成され、どのように受容されてきたのかを明らかにする。

二 諸本の様相

まず、諸本を確認する。現在の研究水準を示し増補本まで含めた校本である和歌一字抄研究会編『校本 和歌一字抄』（風間書房、二〇〇四・二）以下『校本』では、井上宗雄が提唱した三分類を踏襲している¹⁾。清輔の手による姿を比較的留め、後代の増補歌は無いとみられる原撰本系統、下巻のみながら、定家の歌が十首ほど増補されているだけとみられる中間本系統、上下巻にわたり裏書にあつたと思しき鎌倉時代以降の歌が増補されている増補本系統の三系統の分類である。左にその分類と主要伝本とを示すが、増補本の二類から五類までは未流伝本のようにであり、原撰本系統を重視する立場から今回は検討対象としない。

原撰本系統（上巻のみ）

I 《草稿本系統》

1

京都女子大学蔵谷山茂旧蔵本（〇九〇・Ta八八・九七）
三康図書館蔵本（五・一二三九）上巻

2

宮内庁書陵部蔵本（一五五・一〇八）

Ⅱ《改稿本系統》

国立公文書館内閣文庫蔵本（二〇二・六一）

中間本系統（下巻のみ）

架蔵本（井上宗雄旧蔵）

三康図書館蔵本（五・一二三九）下巻

増補本系統（上下巻）

第一類

宮内庁書陵部蔵本（一五〇・六五三）＊『新編国歌大観』・『校本』

底本

川越市立図書館蔵本（四三三〇）（貴・十一）

神宮文庫本（三・九一五）

志香須賀文庫蔵日野資時本

樋口芳麻呂蔵本

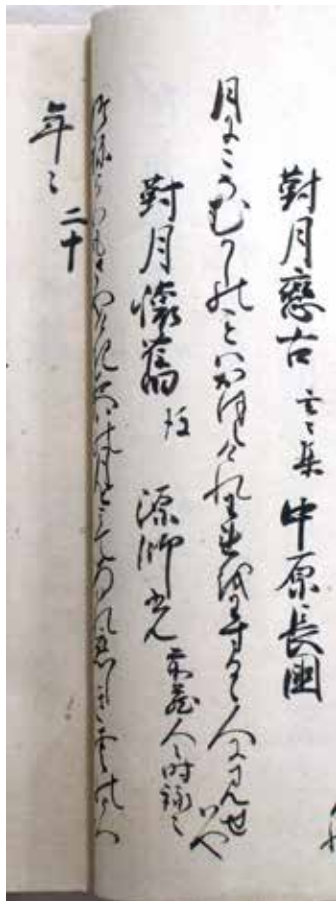
国立歴史民俗博物館蔵本（田中穰旧蔵典籍古文書一五箱七三六）

原撰本系統は草稿本系統（Ⅰ）と改稿本系統（Ⅱ）が存し、さらにⅠは二類にわかれる。草稿本から改稿本への改訂は清輔の手によると見られており、原撰本系統を中心に研究されてきた。原撰本は上巻のみの残闕本で完本が現存しないが^②、一覽に掲げなかった大阪青山短期大学蔵本が原撰本系統の下巻に該当する可能性を残す^③。中間本系統は下巻のみが現存する。こうした状況から『和歌一字抄』の利用は、後人の手が入っていない原撰本系統か、『新編国歌大観』に収載される増補本系統に依拠する形で進められてきた。だが、原撰本系統にも作者名等の誤りが多く、さらに注記に関してより複雑な事情が存している。次に原撰本系統の諸本を中心に注記の問題を考えたい。

三 作者注記と出典注記

『和歌一字抄』には作者注記と出典注記が付されている。次の図1のように、歌題の下に書かれているものを「出典注記」と称し、作者名の下に付されたものを「作者注記」や「詠者名注記」と呼び習わしている。基本的には注記位置の違いと注記の対象によって呼称を変えているのだが、注記の位置が両者の違いを決定づけているわけではない。図1では、「源師光」とある作者名下に「前藏人之時詠之」と、詠作機会に関する注が記されている。こうした位置の異同は特に「已上」で纏める注記に甚だしい。

図1 内閣文庫蔵本



出典注記には散逸歌集の書名が見える。これらについて井上宗雄、梁瀬一雄による検討があり^④、蔵中さやかの研究が現在の水準を示す^⑤。蔵中は、これらの注記は後代に付された可能性が高いとする。

この注記はいつ頃付されたものであろうか。

先にも触れた61（梅田注・『校本』七四番歌）の詠者名に付された「藤内大臣 左大將」に、一つの考察材料がある。『公卿補任』の記事によれば、「内大臣」つまり実能は、仁平四年八月十八日左大將に任じられており、少なくともこの注記はそれ以降に付されたものとなる。『和歌一

『字抄』の成立下限は仁平四年（十月二十八日、久寿に改元）と考えられ、井上氏は特に同年五月二十八日に出家している右大臣雅定がⅠ（原撰本系統Ⅰ・梅田注）で「右府」、Ⅱ（原撰本系統Ⅱ・梅田注）で「右大臣」となっていることを根拠として示しておられる。奇しくも実能の左大将補任は雅定の出家の後を埋めるものであり、清輔が雅定出家前後の呼称の変化に厳密にこだわったなら、本文の成立は五月二十八日までであり、注記は八月十八日以降に加筆されたことにある。さらに後人の手になることも十二分に考えられ、断定はできない。が、とりあえず61の例からは、本文と詠者名注記の同時成立は可能性が低いという見方ができるのではなからうか^{（6）}。

蔵中は作者注記について右のように述べ、出典注記に関しては以下のように述べる。

この他に『和歌一字抄』には出典注記と呼ばれているものがある。これはⅡに多いが統一した観点で付けられておらず、誰が付けたのかという問題がある。ただⅡ¹⁶⁴（『校本』一二六番歌・梅田注）「関白殿蔵人所歌合年号可尋」やⅡ³⁹⁸（『校本』五一四番歌・梅田注）「無名可尋」という注記があるところからすると、撰者自身ではなく、後代の書写者によるものと考えるのが適当ではないだろうか。（傍線原文）^{（7）}

こうした検討を経てもなお、注記が清輔の手による可能性が完全に除去されたとは断定できないように思われる。たしかに、作者注記の同時成立の可能性は低いと認められるが、注記を追記することは不自然な事とも思われない。

そして、実能の注記はⅡにはなく作者名は「内大臣」とされる。増補本系統書陵部本では「実能公 公実男」とあり、諸本間で異同が見られるケースである。一五四番歌の出典注記にある「年号可尋」はたしかに問題が残るが、「関白殿蔵人所歌合 年号可尋」とあるうち「年号可尋」を後代の書写者が付したのであれば、「関白殿蔵人所歌合」の注記自体はそれ以前から存していた可能性が考えられる。また蔵中の挙げるⅡ三九八（『校本』五一四番歌）の作者名と作者注記の「無名可尋」はⅡのみに存し、Ⅰは「無」、増補本

系統は「無名」で「可尋」はない。蔵中が引用部分の少し前で指摘するように、Ⅰの作者名には明確な誤りも存し、それらの誤りが一次資料から清輔が抜き書く際のミスに起因していると思われる例もあるなど、情報の正確さに関して疑問が多いのは事実である。しかし、妥当ないし少なくとも誤りではないと認められる作者注記も多く、注記の正誤率を基準にしたところで、それが清輔のミスや制作上の混乱が反映したものなのか、それとも後人のさかしらであるかを決定づける要素には必ずしもならない。

こうした状況から、出典注記、作者注記の全てを清輔が付した、あるいは全て後人が付したと考えるよりも、一部は清輔の手による注記があり、それに準じて後人が付したものとあるといった複数段階の成立を考えるのが穏当ではないだろうか。だがここでは、清輔の手が一つも入っていないと断定する根拠は存しないことを、指摘しておくに止めたい。

原撰本系統でもⅠとⅡとの間に注記の違いがある。Ⅰには作者注記が多く、出典注記はほとんど見えない。原撰本系統諸本の注記を一覧すると左の表1のようになる。これらはすべて注記の位置によって取った。書陵部本の出典注記には『勅撰一字抄』を参照したと思しき記述を含んでおり、右肩に注記が付される場合もあるのだが、基本的にはⅠには出典注記は付されなかったと考えてよい。

Ⅱでは作者注記の大半が削られるが、代わりに出典注記が大量に存している。現象だけ見れば後人の増補ないし抄出を疑うに十分であるが、作者注記に関してはⅠ・Ⅱで共通するものもある。

表1

	作者注記数	出典注記数
三康本（Ⅰ1）	84	1
谷山本（Ⅰ1）	82	1
書陵部本（Ⅰ2）	89	2
内閣文庫本（Ⅱ）	8	96（歌会表記含）

これらの作者注記は諸本で揺れる。まずは一二三の作者名である。Ⅱでは「頼氏式部太輔」、Ⅰでは三康本と書陵部本「中原頼長式部太輔」、谷山本「頼長

式部太輔」と示される。増補本系統書陵部本では「頼氏式部太輔」とあってⅡと一致する。「中原」姓に関する注記の差異はあるものの、「式部太輔」という官職は一応諸本で一致する。しかし、「頼長」「頼氏」の異同があり、該当する中原氏の人物は確認できない。藤原氏かとも疑われるが、他出が確認できず未詳とせざるを得ない。

「素意法師」（二七五）の例では、増補本系統に「紀伊入道」とあり、原撰本ではⅡ「素意法師入道」、Ⅰ類本では書陵部本「俗名重経素意法師」、谷山本・三康本では「素意法師俗名重経」である。内閣文庫本は「素」にも読める字形となっている。「紀伊入道」と「俗名重経」という原撰本系統での注記の異同が見られる。

一方、原撰本系統と増補本系統で注記が一致する例もある。「橘為通監物」（三〇一）は増補本も含め諸本間でも注記が一致している。為通は『小右記』長和三年十月条に「進士橘為通」と見える人物であろうか。卑官で他に和歌が見えない。また監物であった記録も管見に入らない。増補本系統には「正通」とする異本もあるとする異本注記もあるが従いがたい。このような人物を「監物」と付すのは原資料に当たった徴証と考えられないだろうか。なぜならば、Ⅱ類本には出典注記と作者注記が共に付されているケースが見られるからである。次の二首は内閣文庫本の本文で示す。

見花送日打聞 橘為通監物

春毎に咲きぬちりぬと花を見て身のいたづらに老いにけるかな

(三〇一)

遠山雪上科抄 頼氏式部大夫

よそにのみよしの、山の雪とみて我が身のうへとしらずもあるかな

(一一二)

このように『打聞』（良暹打聞）と『上科抄』の出典注記をもち、さらに作者注記も同時に付されている歌が見える。これらは散逸歌集の作者名表記を継承した注記かと考えられる。「御堂三十講御歌合」（一三六）には証本が現存し、「前越中守祐拳」という『和歌一字抄』とほぼ同じ作者名が確認できる⁽⁸⁾。「前」は脱落か。「五首俊綱会」の「義孝伊勢前司」（五一九）の注

記も証本は現存しないが、同様の現象であろう。

原撰本系統の作者名注記を閲する限りでは、明確に清輔没後に付された官位を特定できるものはない。Ⅰの作者名と注記は、例外もあるものの「姓十名十官職」という基本形をもっている。この注では「勘物」としては不十分であろうし（清輔本勅撰集に付与された勘物に鑑みれば、その情報量の乏しさが理解されよう）、依拠した資料の表記を流用したのではないかと疑われる。また、下巻にも中間本系統と増補本系統とで共有する注も存している。これらは鎌倉時代に本文が増補される以前から存在した注を継承したと考えても矛盾はないと思われる。こうした諸相から、現存する注記の全てではないにせよ、清輔が作者注記を施していた可能性はありうろと考える。

四 出典注記の性質

次に出典注記の性質を考えたい。Ⅰ類本にはほとんど存しないため、Ⅱ類本の内閣文庫本を考察の対象とする⁽⁹⁾。まずは出典注記が見られる歌を一覧してみる。歌番号は『校本』の番号を使用する。

〔勅撰集〕

拾（拾遺集） 9 354

後拾遺 1

後（後拾遺集） 55 83 85 110 117 144 159 278 283 287 288 269 377 389 473 485 503 531 553 569 574 578 586 592

同（後拾遺集） 570 571 572

金（金葉集） 8 16 23 25 34 50 57 60 73 74 96 131 157 161 164 174 187 119 255 263 271 279 328 345 358 365 372 375 387

394 417 452

464 465 512 539 594

詞（詞花集） 97

〔私撰集〕

良暹打聞 6

打聞・丁聞 22 52 92 269 415 462 507 524

良山集 30

打聞仙集 37

哥合 45

良 102
323
373
468
494
509

上科抄 113

上 114

上々 133

玄々集 158

河原院歌合 260
510

河原院会 522

堀河院中宮哥合 306

〔左注を含む複数首包括型の注記〕

已上御堂歌合 137

已上御堂三十講哥合 138

皇嘉門院立后後始会 153

已上三首同座 348

以上同座 401

已上俊綱会 448

已上五首俊綱会 520

〔その他〕

関白殿藏人所哥合年号可尋 219

金於朱雀院詠之 222

七月七日詠之 431

以上のように、出典注記は『後拾遺集』『金葉集』が突出して多く、私家集は見えない。一方で散逸私撰集「良暹打聞」「良」「上科」「上」等の注記が存していることは既述のとおりである。また歌会・歌合の注記や、「七月七日詠之」といった詠作事情に関する注記も存在する。歌会の「已上」の部分は諸本で異同・書式の変更が大きい部分ではあるが、特に歌会に関しては

証本の現存が確認できず、他出も確認できない。統一した基準で付されていないことは明白だが、注記の一部は信頼できる出典を示している。内閣文庫蔵本の本文で示す。

遠草漸滋堀河院中宮哥合 無名

しかふへそなりもゆく哉きゝす鳴かたのゝみのゝ萩のやけはら

(三〇六)

この歌では「堀河院中宮歌合」が出典として記載されている。当該歌は『廿卷本類聚歌合』断簡に「中宮歌合嘉保三年三月廿三日於侍所合之」として証本が現存する。『夫木抄』にも取られており、同じ機会の歌とみられる歌がもう二例見られる。

嘉保三年三月堀河院中宮詩歌合、草漸滋 読人不知

したふかくなりもゆくな雉子啼くかた野のみの萩のやけはら

(夫木抄・六一三)

嘉保三年三月堀河院中宮詩歌合、旅宿暁鶯 同

明けぬとていそぎ立田の山路にはうぐひすの音やせきの関守

(夫木抄・三五七)

『歌合大成』では「永長元年三月廿三日 中宮篤子内親王家侍所歌合」(二三三)として詩歌合ではないと考証している。おそらくその通りかと思われるが、廿卷本歌合以外の証本がない歌合資料の注を付している点、注意されよう。次の例は内閣文庫蔵本独自の注記である。

山路露深良 師俊

夕きりにあさの衣てそほちつゝ冬木こりつむをのゝ山人

(四九四)

この歌の他出も『夫木抄』に確認できる。

家集、良玉 大納言師俊卿

夕露にあさのさごころもそほちつゝ冬木こりおくをのゝ山人

(夫木抄・八二六四)

このように『夫木抄』と『和歌一字抄』の出典注記が共通する。もちろん、それぞれの伝本の問題もあつて全て諸本が該当するわけではないが、両書の

侍りける

大納言長家

はるさめにちる花みればかきくらしみぞれし空の心ちこそすれ

(千載集・春下・八二)

『千載集』に歌題が記されておらず、『和歌一字抄』とは別の撰歌資料に依った可能性が高い。この例を考える限りでは、後人が『和歌一字抄』の出典注記を勅撰集とつきあわせながら出典注記を付したとは考えにくいと思われる。

同様のケースは『続詞花集』との一致歌にも見える。

同良

資仲

水にうつる影のながる物ならば末くむ人も花はみてまし

(四二七)

この歌は同題で『続詞花集』に入集する。

花影写水と云ふ事を

前大宰帥資仲

水にうつるかげのながる物ならばすゑくむ人も花はみてまし

(続詞花集・春下・五二)

この一首では『続詞花集』ではなく『良玉集』の注記が付される。顕昭や季経といった六条家歌人が出典注記を記したならば「続詞花」と注するほうが自然だろう。『千載集』と『続詞花集』の二例を見ただけであるが、先に見たとおり『和歌一字抄』全体における『千載集』との一致歌は二〇首、『続詞花集』では三八首に達する。これらのうち、一首として両集の注記が付されていないのは後人の追加としてはあまりにも不徹底の感が否めない。他出歌は少なくとも「良」「打聞」の出典注記は、後人による他出調査によって付されたのではない可能性が高いと考えられる。

五 『後拾遺』時代の私撰集

出典注記は特定の私撰集に付される一方、『詞花集』以降の勅撰集と『続詞花集』の注記は付されなかった。では、どのような私撰集が出典注記に付

されたのであろうか。『良暹打聞』、『上科抄』、『良玉集』を中心に確認したい。清輔の同時代資料として『和歌現在書目録』から該当する記述を抜き出す。

良玉集十巻。

八條兵衛佐入道顕仲撰之。金葉集撰之比。大治元年十二月廿五日撰之。

上科抄。へ上下、上巻古人、下巻近代大江広経撰。へ

良暹打聞。

『良玉集』は『金葉集』撰の頃、大治元年十二月廿五日に撰ばれた、藤原顕仲撰の私撰集である。近年、真名序の一部と奥書が発見されたが、歌集そのものは散逸している¹³⁾。諸書に記述や入集歌が残り、築瀬による集成がある¹⁴⁾。

『上科抄』も確認してみたい。著者は大江広経。『勅撰作者部類』には「広経 四位伊賀守。遠江守大江公資男。至寛治三年」とある。広経は教長とも交流があったらしく、次の歌が『貧道集』に載る。

大江広経河原院にて水上月と言ふことをよませしついでに

くもはらふかぜとはなれどつきかげのやどれるみづのなみのさわざよ

(四二四)

また『後拾遺集』に一首入集。およそ『後拾遺集』から『金葉集』の時代にかけて活躍した人物である。『作者部類』に「至寛治三年」とあるが、これは近年の研究が示すとおり、必ずしも没年とは考えられない¹⁵⁾。『上科抄』の成立は寛治三年より繰り上がる可能性がある。清輔も『上科抄』を『袋草紙』に引用している。『良暹打聞』については、俊成の『古来風体抄』に後拾遺以前の私撰集の記述中に書名が見える。

又後拾遺より前、勅撰にはあらで私に撰べる集どもあまたあるべし、能因法師は玄々集といひ、良暹法師は打聞と云、また撰者誰となく麗花集といひ、樹下集などいひてあまたあるを、後拾遺撰ぶ時、能因法師の玄々集をば、などにかありけん除けるを、詞花集には、勅撰にあらねばとて、玄々集の歌を多く入れたればにや。

勅撰集の歌が何を採歌源としているのかという問題は歌人にとって強い関心を惹かれるものであった。俊成が『詞花集』に『玄々集』の歌を多く入集

させたことに注意を払い、『後拾遺集』前後に作られた多くの私撰集が顕輔、清輔の時代まで採歌源として利用されていたことを述べている。

勅撰集ではない『和歌一字抄』にも、程度は異なるれども同じ関心が向けられていたと考えれば、『後拾遺集』『金葉集』時代の私撰集が集中して注記に組み入れられている点に、しかるべき意図を読みとりうる。ただ、『麗花集』と『樹下集』が見えないが、撰者に疑問があつたため除かれたのであろうか。出典注記がⅡ類本において清輔によつて付されたと考えてよいならば、これらは前時代の私撰集を出典として記したことになる。この出典注記の傾向を政治的状況の変化による本書の改稿と密接に関連する現象と捉えることができるのではないか。草稿本から改稿本への改訂を、蔵中は次のように論じている。

従来からの研究通り『和歌一字抄』は崇徳院句題百首開催後、仁平年中にⅠの形態で草稿本的性格を残しつつ、一応の成立をみたと思われる。それは歌会における題詠の隆盛を敏感に察知した清輔が、『歌題中の文字から、その文字を含む歌題による詠を検索するための書物』という画期的アイディアをもつて編纂した、前代になき形の選集であつた。その入集歌人は自ずと題詠歌を多く残した先行歌人、俊頼、顕季、匡房、経信らが中心となるが、また、新院すなわち崇徳院の詠十一首を含む内容であつた。この崇徳院への処遇は、恐らく『和歌一字抄』を奏覧、献呈することを視野に入れたものであろう。(中略)

それゆえ、奏覧をも予期した未定稿本の形であつたⅠから、崇徳院とその歌壇の色彩を薄めるべく努めたⅡの形態が生み出されたのではなからうか。(中略)Ⅱで加えられた和歌には作歌年代の新しいものは避けられ、詠者の呼称もそのままに、あたかも仁平年中成立の如くに、改訂は進められた。ここには撰者清輔の保身の姿勢が窺えるようにも思われる⁽¹⁶⁾。(傍線…梅田)

ここで指摘される、改稿による崇徳院歌壇色の低減と、草稿本から改稿本への出典注記の追加を、相互に関連する現象と見てはどうだろうか。もし清輔が自身や一族の和歌詠作のための証歌集として出典注記を施したのなら、

より徹底して出典や作者に対する注や勘物を付したはずである。注記の不徹底さは清輔によるものではない論拠にもなってきたが、改稿に伴つて清輔が付したという前提に立つならば、異なる見方ができる。

これらの出典注記には崇徳院歌壇色を薄める効果が期待されたのではないだろうか。蔵中は仁平年中成立を偽装するかのよう改訂が進められたとするが、それより以前の詠作を目立たせる意図もあつたのではないか。『後拾遺集』『金葉集』時代の撰歌集に集中する注記を付すことで、あたかも採歌源が『後拾遺集』『金葉集』時代の秀歌に集中しているように印象付けようとしたのである⁽¹⁷⁾。このように考えると、作者注記が通減されたかどうかについての問題を残すことになるが、改訂時に作者名表記に手を入れていると考える以上、その可能性を考えておくべきであろう。

六 『和歌一字抄』はどう読まれてきたか

この「歌集の印象」の問題を別角度から考えたい。『和歌一字抄』は、歌題索引付歌集という前例をみない性格だけではなく、秀歌集としても読まれてきたことを、井上宗雄は次のように述べる。

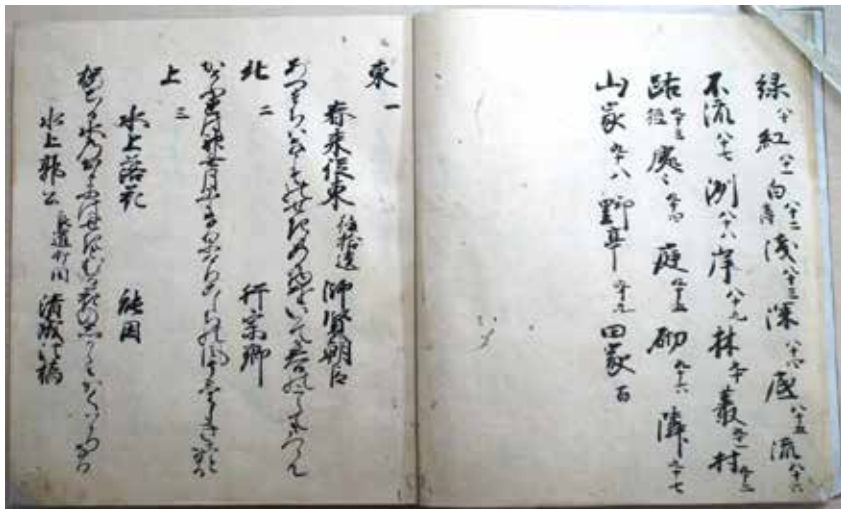
一見して私撰集のようにみえるが、主たる目的は作歌の便宜に資する所にあつたと思われる。あるいは作歌と共にその字の使われた先縦を、和歌調査において探るため、ということがあつたかと想像される。その意味では作歌手引き書といつてよく、広く歌学書の範疇に入るのであろうが、『桑華書志』所載「古蹟歌書目録」(尊経閣蔵)には「第六 私撰集一字抄一部 四帖」と見え、また「私所持和歌草紙目録」(冷泉家時雨亭文庫蔵本)にも「打聞」(私撰集)の中に「一字抄」があるのは形態が私撰集にみえるからであろう⁽¹⁸⁾(傍線…梅田)。

また日比野浩信も、井上論を受けて次のように記す。

『和歌一字抄』は、『古蹟歌書目録』には「私撰集」、「私所持和歌草紙目録」にも「打聞」として記載されており、その形態から歌集として扱われていたらしいことは、小さからぬ意味を持つ。觀賞に足る秀歌撰とし

て享受された可能性を示唆することになると考えられるからである。現代の我々は、それぞれの歌について、それが優れた歌であるか否かの判断がし辛い。しかし、秀歌撰であれば、そこに採録される歌は、単なる用例ではなく秀歌と認めてよからう。多くの「歌学び」的用途に供されたであろうことも推察されよう。(略) また、同時に、『和歌一字抄』が単なる既成撰集資料からの抜粋などではないことが自明であり、清輔撰の私撰集としての意味をも持ち合わせていることになる⁽¹⁹⁾(傍線・梅田)。

図2 内閣文庫蔵本



↑本文開始丁

↑目次末

井上が題詠の際の「作歌の便宜」、日々野が「歌学び」の用途を想定するように、『和歌一字抄』は実用的な歌学書であったと指摘されてきた。『古蹟歌書目録』等を手がかりに、秀歌撰としても読まれていたことも指摘される。これは「歌題を検索して読むか(則ち頭から読まないか)」「秀歌撰として頭から読むか」の違いとして理解できる。『和歌一字抄』が「作歌」や「和歌調査」に利用できるのは、「目次と標目の対応」という他の歌集にはない機能が付与されているからである。図2は内閣文庫蔵本である。

右の丁裏は目次の末の部分で、標目の漢字の下に通し番号や副標目が掲げられている。本文には目次と対応する標目と番号が掲げられており、その題で読まれた歌と作者が記される。

この目次と本文の標目が対応するため、目次からの「歌題の漢字による検索」が可能となるのである。多くの諸本は目次を有するが目次を持たない本もある。

次の図3・図4は架蔵本である。本書は井上宗雄旧蔵で翻刻も存する⁽²⁰⁾。該書は下巻のみの零本であるが、外題はなく、一丁表に直書で内題が書かれ「三十六番相撲立詩歌」と記す。なお基俊に同題の書があるが無関係である。次の丁から歌が始まり目次はない。つまり目次の「題」からは歌題を検索できない「歌集」なのである。

『和歌一字抄』は、目次と標目が存する状態ではじめて「歌学書(索引)」としての利用が可能なのである。逆に「目次と標目」に注意しなければ秀歌撰として読むことができる。清輔自身も、秀歌撰と歌題索引証歌集の両様の性質を持たせる採歌と工夫を心がけていたのである。先に述べた、注記の操作による「印象」は、書物内容全体を把握して初めて感得されることである。歌題索引としての利用のみを考えられていたならば、こうした操作は無意味なはずだから、Ⅱ類本の出典注記を清輔の所為と考えて良いならば、『和歌一字抄』には当初から全体を一度は通読する秀歌撰としての性質が認識されていたと考えられる。そして、目次の欠脱が発生する本があることは『和歌一字抄』が完全に秀歌撰として享受されていた証左ともなるだろう。

『和歌一字抄』とは、読み手が求める利用方法により、歌集と歌学書の間を揺れ動く書物なのである。外題・内題は「一字抄」とある諸本が多いが、書名から歌題を「一字」で引く本であると認識されていたかはわからない。というのも、「一字から歌題を引く」性質の書物は例がなく、享受者にはそのコンセプトが理解されにくかったのではないかと疑われるからである。鎌倉時代には歌題の検索に特化した歌学書として新古今歌人の詠作が増補されるのだが、同じ歌題一字引きの書物は後水尾院編『一字御抄』(元禄三年刊)まで待たなければならず、一般的な歌学書の規格とはならなかった。

諸本を見る範囲では、標目や目次といった〈構成〉を増補・改変するといった構造にかかわる大規模な改変が幾度も行われた形跡は認められない。つまり、標目となる漢字を増やすといった「検索の範囲を広げる改変」が行われなかった。その一方で例歌の増補や抄出が行われ、出典注記などが施されていた。時代が下ると、丹鶴叢書本のように出典頭注の増補や標目類の書式の変更も行われるようになる。

『和歌一字抄』は、その特異なコンセプトと政治的な状況に対応した性質を持たせられていた。そのため、当初の「歌題索引」と『秀歌撰』という二つのコンセプトの二面性を浮き彫りにしながら変容していく書物なのである。こうした様相の詳細については増補本系統の諸本の問題と共に、今後の課題として残されることになる。『和歌一字抄』という書物の複雑な異本関係は、制作上の事情だけでなく、書物のコンセプトの享受の様態を反映している。



図3 架蔵本



図4 架蔵本

【付記】

和歌番号は原則として新編国歌大観によったが、『和歌一字抄』は『校本』の番号によった。書名なく番号のみを書く場合は全て『校本』の歌番号である。一部都合で歌番号に漢数字とアラビア数字が混在する。『和歌現在書目録』は続群書類、『勅撰作者部類』は山岸徳平編『八代集抄全註』（有精堂出版、一九六〇年）、『古来風体抄』は歌論歌学集成によった。割注は◇で括った。写真は私に撮影したものを利用し、縦横比を維持して若干の加工を施した。貴重な資料の閲覧・画像の使用を許可くださった関係各機関に御礼申し上げる。本稿は二〇一四年度日本文学協会秋季大会での発表を元に成稿した。席上ご意見をいただいた先生方に御礼申し上げます。

注

- (1) 増補本系統の分類には、中村康夫「藤原清輔編『和歌一字抄』原撰本系統の校本作製の試み」(『国文学研究資料館紀要』二〇、一九九四・三)において中村による未刊行の論に依拠しているとある。増補本系統諸本についての翻刻や紹介は妹尾好信、日比野浩信らによって進められており、『古代中世国文学』一八号(広島平安文学研究会、二〇〇二・一二)では『和歌一字抄』についての特集が組まれている。
- (2) 井上宗雄「原撰本『和歌一字抄』について」(『立教大学日本文学』四四、一九八〇・七)。同「藤原清輔伝に関する二・三の問題と和歌一字抄と」(『国文学研究』二五、早稲田大学国文学会、一九六二・三)。
- (3) 伊井春樹「伝後光厳院筆『和歌一字抄』の本文」(『日本文学史論 島津忠夫先生古稀記念論集』世界思想社、一九九七年)。藏中さやか「『古き詞』へのいざない―『和歌一字抄』、『袋草紙』証歌群をめぐって」(『古代中世和歌文学の研究』和泉書院、二〇〇三・二)。
- (4) 井上前掲論文。築瀬一雄『築瀬一雄著作集三 中世和歌研究』(加藤中道館、一九八二)。
- (5) 藏中さやか『題詠に関する本文の研究』(おうふう、二〇〇〇)。同「平安

末期における題詠法、素描―歌題と和歌表現の接続―(『王朝文学と本質と変容 韻文編』和泉書院、二〇〇一)。また、注記に関しては井上前掲論文も言及している。

(6) 蔵中注 (5) 前掲書。

(7) 蔵中注 (6) 前掲書。

(8) 長保五年五月十五日左大臣家歌合。『歌合大成』(二〇九)。

(9) 小内一明「紅葉山御文庫本 和歌一字抄(内閣文庫蔵)(翻刻)」(『日本文学研究』四、大東文化大学日本文学研究會、一九六五・二)に詳しい。尚、小内は諸本の内題及び書目類から『和歌一字抄』は「一字抄」が原名だったかと指摘する。

(10) 小川剛生「古歌の集積と再編―『扶桑葉林』から『夫木和歌抄』へ―」(夫木和歌抄研究会『夫木和歌抄編纂と享受』風間書房、二〇〇八)。

(11) 蔵中注 (6) 前掲書。

(12) 冷泉家時雨亭叢書『和漢朗詠集 和漢兼作集 尚菡会和歌』(朝日新聞社、二〇〇五年)。『尚菡会和歌』は零本であるが巻頭に「扶桑葉林」の内題があり、大部の著であった「扶桑葉林」の一部であったことが知られる。小川注(9)前掲論文参照。

(13) 久保本秀夫『中古中世散佚歌集研究』(青簡舎、二〇〇九)。

(14) 築瀬注 (4) 前掲書。

(15) スピアーズ・スコット「勅撰作者部類」注記考―「至々年」は何を意味するのか―(『研究と資料』六一号、二〇一一・七)、小川剛生「五位と六位の間―十三代集と勅撰作者部類」(『軍記と語り物』五〇、二〇一四・三)。

(16) 蔵中注 (5) 前掲書。

(17) 「已上」型の歌合・歌会注記も同質の効果があつたものであろう。また「詞花」が一箇所あるが、これも清輔の手によるとみても構わないと思われる。蔵中も指摘する通り改稿の目的は「崇徳院歌壇色」の「逋滅」であつて「消滅」ではないからである。

(18) 『校本和歌一字抄』解題。

(19) 日比野浩信「和歌一字抄―「歌遊び」の具現―」(『国文学 解釈と鑑賞』

五〇―四、二〇〇五・四)。

(20) 文弥和子「花の屋旧蔵和歌一字抄井上宗雄氏蔵(翻刻・解題)」(『日本文学研究』八・大東文化大学日本文学研究會、一九六九・二)。

Regarding the Note in the “Wakaichizishō”

Kei UMEDA

Abstract

This paper discusses what the “-Wakaichizishō” (和歌一字抄) is and how it was established, as well as its reception.

We have adopted three approaches in order to clarify these points. The first thing is to check the books of various situations. This is made possible by a compilation of varying variations of a classic: variations on the “-Wakaichizishō-.”

The second is to examine the note in the various books, which is the emphasis of this paper. In each, there is a note underneath the poem's title and author's name that describes both the author, and source.

The third is to consider the nature of the notes. I believe that the authors themselves wrote these notes, in order to manipulate the impression of the songs.